Fine
JOBU International Education and Research Development Center
VOL.1 2007 October
上武大学国際教育研究開発センターニューズレター

国際教育研究開発センター開設に寄せて

学校法人学文館　理事長　三俣　喜久枝

本学は昭和43年伊勢崎の地に商学部を擁する単科大学として開学し、爾来今日に至るまで、建学の理念である雑草精神を機軸として、実学重視の人間教育を実践してまいりました。この間に経営情報学部、大学院、看護学部を順次開設し、今年度からは大学院に東京サテライトキャンパスを新たに加え、学部構成も３学部３学科から改組し、3学部6学科編成と大きな改革を行いました。

そして同時に新しい大学の顔として「上武大学国際教育研究開発センター」を開設いたしました。これは学内における教育研究の質的評価を行いながら、常によりよい教育を実践していくためのさまざまな取り組みを提案し、推進させていく機関であり、同時に研究の活性化を促しながら、その成果物や今日までに培ってきた教育資産等を有形無形にかかわらず、地域社会に還元することを目的としております。さらには、ITの普及によりますますグローバル化が進展していく現代社会において、本学の教育研究をより多くの地域、ひいては国際社会に敷衍させていくこともこのセンターの大きな役割と考えております。

折りしも大学におきましては18歳人口の減少による全入時代を目前にし、各大学の個性化・差別化が叫ばれております。また大学としての質の保全も社会的に要求されており、内部でも、外部においてもあらゆる教育研究項目にしたがって評価をうけていかなくてはなりません。特色ある教育や先端的な研究を実践していかない大学はやがて淘汰されていくことになるでしょう。本学において3学部6学科体制を敷き、専門的な教育の特色を明確化したことは、こうした時代の流れに沿うためのものです。また国際社会との情報交換の場として、東京にサテライトキャンパスを置くことは必須であり、ここを拠点として今後の大学の情報発信・授受が拡充されることと思います。センターではこうした大学の機能を統括し、学部や学科を超えて横断的な大学活性化の取り組みを推進する牽引力的役割を担ってまいります。そしてあらゆる地域において、上武大学の教育研究を周知し、新たな大学の役割を構築させていきたいと考えております。

大学関係の各機関の皆様方には、こうした本学の取り組みをご理解いただくとともに、今後もこのセンターの活動や運営につきまして、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

CONTENTS
vol.1 2007 October

国際教育研究開発センター開設に寄せて……1
学校法人学文館　理事長　三俣喜久枝
上武大学の現状と展望……2
上武大学　学長　奥山忠信
上武大学国際教育研究開発センターの使命と活動内容……4
上武大学国際教育研究開発センター長　一戸　真子
競争の国際化……6
上武大学ビジネス情報学部　学部長　荒川　隆
国際教育研究開発センターの開設に当たって……7
上武大学経営情報学部　学部長　栗原　信征
新時代の大学院教育……8
上武大学大学院　経営管理研究科長　柴川　林也
着任の挨拶を兼ねて……9
上武大学看護学部　看護学科長　森田　孝子
雑感……10
上武大学経営情報学部　講師　竹内　芳衛
コラム　「地球の嘆き」……11
上武大学ビジネス情報学部　教授　中村　雄司
トピックス……12

0.1 上武大学の現状と展望

The One

上武大学　学長　奥山　忠信

今日における建学の精神

本学は雑草精神（あらくさだましい）を建学の精神として、1968年商学部からなる単科大学として設立されました。その後、1986年経営情報学部、1997年大学院経営管理研究科修士課程を開設し、2002年商学部をビジネス情報学部と改称、2004年に看護学部を設置し、現在は3学部1研究科の体制を採っています。

建学の精神である雑草精神は、雑草のような不撓不屈の精神を意味します。本学の設立時期は、戦後日本の高度成長期とこれに伴う激しい社会変動の時期に当たります。また、日本の伝統的な価値観が大きく変化した時期でもあります。本学は高度の専門的な職業人を教育する大学として設立されましたが、雑草精神の求めるものは、社会的な変化に流されることなく、自ら考え、高い倫理観を持って社会に貢献する人材の育成にありました。

以後、日本経済は繁栄と転落を経験します。日本型経営が世界の注目を集めた1980年代の繁栄と90年代以降の挫折です。情報や金融の分野を中心に、多様な分野でグローバリゼーションが急激に進展するとともに、市場における競争原理も復権し、我が国の立ち後れが目立つようになってきました。

この流れは今も進行しています。これに伴って、時代が要求する教育も、大量生産・大量消費の時代とは大きく異なってきています。各人が均質な知識や技術を身につけているだけでは新しい時代に対応できなくなっているのです。大学を卒業した社会人に求められるものも、画一化された均質な知識よりも、独創性、人間性、専門性といった個性重視の方向へと転換しています。今日の社会は、ますます高い水準と独創的な知識を身につけた人材を求めているのです。

新しい時代の社会像を「知識基盤社会」（Knowledge-Based Society）として捉えることが教育機関にも求められてきています。その意味するところは、受け身の知識ではなく、自ら主体的に問題を発見し、自ら学び、個性的な解を求める知恵を身につけていることです。一人一人が自らに問いかけ、主体的に学び、自分の問題関心に従って専門性を磨き、個性的な解決の方向性を見つける人材が、今日求められているのです。周囲に流されることなく、不屈の精神を尊ぶ本学の建学の精神が再び活かされる時代なのです。

本学は実学を志向した教育と研究を行っていますが、実学的な教育と研究は、現在ますます必要になってきています。しかし、現在必要とされる実学は、個性的な解を必要とする実学であり、求められているのは、受け身で仕事をする社会人ではなく、全体を知り、独創的な方向性を打ち出すことのできる社会人です。また、個性的な解は学問的な創造性に裏付けられてはじめて可能になります。これは、科学（science）と技術（art）の問題です。言い換えれば、社会に対する問題関心や個人の仕事上の問題を、自分の価値観を踏まえ、科学の視点から解明する能力が必要とされているのです。

大学の理念と今後

現代社会が「知識基盤社会」へと大きく変化していることを踏まえるなら、個人の感性や問題関心を重視し、科学的な土台を踏まえた実学精神と現実の問題を科学的に解明する個性的な研究姿勢が、本学における大学の理念となります。

また、大学には高い専門性が求められると同時に、高い教養も求められます。現代社会が高い専門性を持つ個性的な人材を求めれば求めるほど、幅広い教養に裏づけられた人間性が重要になってくるのです。歴史、国際関係、社会、自然科学等に関する幅広い教養が、個人の問題関心と価値観を形成し、さまざまな問題における判断の土台となるからです。価値観の形成と判断の土台となる幅広い教養を持つ人材の養成もまた、本学の理念とするところです。

1990年代以降、グローバリゼーションの波が世界を覆っており、大学も国際的な競争の下にさらされることになります。しかし、現在進行しているグローバリゼーションが、その主導国に合わせて世界の均質化をもたらしており、このため、この波に飲み込まれる側の国々や地域が個性を喪失しています。また、グローバリゼーションの進展に伴って、市場主義、競争主義が社会における主要な価値観として定着するにつれ世界中で貧富の格差が拡大しつつあることは、しばしば指摘されることです。

こうした中にあって、大学自身も個性の確立を必要とします。その個性とは、大学の理念によると同時に、大学の置かれている地域性にもよります。本学は地域に向けて貢献するだけでなく、地域の個性を積極的に掘り起こし、これを全国、さらには世界に向けて発信し、交流することで、地域に立脚したグローバリゼーションの流れに参加することを目指します。各大学は大学によって地域性と国際性を分業するものではなく、地域性と国際性を相互に補完するものと考え、大学の発展に活かすことが、今後、必要になってきます。

そこで本学は、第1に、これまでの国際交流の経緯を踏まえ、アジア地域との交流を進め、アジアと日本の双方に貢献すること、第2に、東京を教育・研究の一つの拠点とし、全国に向けて本学の教育と研究を発信し、国際社会との教育研究上の交流を深めること、すなわち、東京を媒介に、群馬に位置する上武大学が全国、さらには世界

の教育、研究機関との相互交流を深めることを目指します。

時代は、社会動態の全体を知り、自らの職場の全体を知り、その上で自分の役割を見定め、未来を切り開く人材育成を求めています。本学は、経営、情報、看護の実学的な分野を特徴としていますが、時代の求めている実学は、科学的な専門性、幅広い教養に基づく価値観、国際性を兼ね備えたものになっています。こうした要請に応じ、職業人として社会的に有為な人材の育成が必要なのです。

また、大学教育は、より良き市民の育成の面も持っています。家庭生活、選挙における判断、良識ある消費者としての市民、地域のリーダーとなる市民等、多くの局面で知識と教養は試されます。大学の教育と研究は、思考し、判断する力を養成するものであり、こうした能力を持つ人材は職場の中だけではなく、幅広い市民生活の中にも活かされるべきものなのです。

学ぶことは生涯の課題です。本学の大学院では、学部卒業生が進学する以外に、社会人にも広く門戸を開いています。大学は、学びたいときにいつでも学ぶことの出来る体制をとる必要があります。大学院はその一つの制度であると考えていますが、我が国においては、人文社会系の大学院教育はさまざまな難しい問題を抱え、立ち後れが指摘されています。しかし、社会人の中に学問的な関心が強いことも事実です。現に行っている仕事の意味を学問的に考えたい、あるいはより深く研究したい学問的課題がある、等々。こうした実学と科学の接点にある社会人の学問的ニーズに応える必要があります。このためには、経営や政策立案の一線で活躍する人材の招聘、本学教員との協力の下での教育・研究体制の構築、夜間・休日開講制、通学・通勤の利便性を兼ね備えたサテライト教室の設置等が必要となります。こうした体制の下に、社会人でありながら研究能力のある人材、すなわち社会人研究者の養成を行いたいと考えています。

研究者は大学や専門の研究機関にだけ必要なのではありません。人文社会系の分野においても、研究能力のある社会人研究者が、職場や社会のリーダーとして活躍し、国際的にも貢献することが今求められているのです。

0.2 The second 上武大学国際教育研究開発センターの使命と活動内容 ―大学の質保証と開かれた新しい大学創造への支援

上武大学国際教育研究開発センター長　一戸　真子

日本の教育再生の中で

ご存知の通り、近年は最も教育現場における変化が激しい時代となりました。戦後60年以上が経過し、新しい世紀に入り、世界人口の変化、科学技術の益々の進歩、それに伴い私たちの生活も変化して参りました。鳥のように羽もなく、ライオンのように鋭い牙もなく、ゾウのように巨体でもなく、またウイルスのようにすさまじい繁殖力もない人間が、この地球上で最も優れた生物として君臨することができているのは、私たち人間には『知恵』があるからだということをいつも痛感しています。飛行機の発明により今では地球の反対側にも自由に移動できるようになりましたし、道具の発達により、多くの生き物と共存または人間社会に有利に展開することができるようになりました。また医療技術の進歩や新薬の開発などにより、少なくとも先進諸国においては平均的には80年という長い人生設計をすることができるようになり、多くの夢と希望を持って生活することができるようになりました。これもまた私たちの『知恵』がもたらした総合的な恩恵ということができるでしょう。しかし一方で、それらの多くの変化に対応できないケースや十分に対策ができない、理解できない状況も見受けられるようになり、その結果、少なからず人々が苦しんでいます。今、もう一度色々なことを考える時間が私たち人間には必要であると思うのは私だけでしょうか。大学という高等教育の場は、まさにこの社会の現象に新しい風や知恵を付加することができる、言葉を変えるとそのことが使命と言えなくはないでしょうか。

センターの使命及び役割

本センターの使命（mission）は、「グローカリズムに基づく上武大学の発展を支援し大学全体の質の向上を目指すこと」であり、さらに4つのサブミッションごとに活動開始をしているところです［図1］。

□自己評価システムの確立（Self-assessment/Audit）

平成16年よりすべての大学、短期大学及び高等専門学校は、教育研究水準の向上に資するため、教育研究、組織運営及び施設設備等の総合的な状況に関し、7年以内ごとに、文部科学大臣が認証する評価機関の実施する評価を受けることが義務付けられました。認証評価制度は、各大学の自己点検・評価を基礎に、第三者機関による定期的評価を受けるという仕組みです。大学認証評価の仕組みは我が国のみではなく、英国や米国などの他の諸国でも行われています。

認証評価の仕組みの中で重要な考え方は、まずは各大学組織が自らの状況を学術的、中立的、公正な視点から検証を行い、社会のニーズや課題を的確に把握し、自らの大学の使命を再確認し、発展につなげる組織的な仕組みを確立することが第一です。第三者による検証は、あくまで、開かれた大学としてのチェックであり、常日頃から自らの大学に働く教職員が一丸となって質の向上に向けた改善を行う努力をした結果ということになります。本学においては既に活動を行ってまいりました自己点検委員会の成果を継承する形で、全学的な取組としての第二発展期としてセンターが中心となり自己評価の仕組みを構築しているところです。

大学という組織の中での工夫や改善を通して、学生への教育の質が向上し、社会的により貢献しうる人材の育成が可能となることは言うまでもありませんが、本学においても組織としての基本的な評価の仕組みであるPDCAサイクル（計画ー実行ー評価ー改善：Plan-Do-Check-Act）に基づく仕組みを取り入れています。教員はそれぞれの専門分野のスペシャリストですが、より個々人の能力が最大限発揮されるためにも、基本的なマネジメントのサイクルを取り入れることにより、更なる大学としての発展を目指しているところです。このPDCAサイクルの大切な視点は、何といっても円：サイクルであるということであると思われます。直線的ではなく、常にサイクルの中で次に活かされるプロセス（process）を重視する点であると思われます。

□教育・研究の支援（Education and Research Development）

大学の質を決める要素としては教育と研究の両者のバランスが重要となってきます。センターは学部間の横断的役目を果たせるよう、積極的に教育および研究への支援を行っていく予定です。

各学部および学科内における検討や発展の支援はもちろんのこと、大学全体としての積極的な情報交換の機会や研鑽の機会の提供を行っていく予定です。中央教育審議会大学分科会検討によると、高等教育機関のうち、大学に求められる機能としては、①世界的研究・教育拠点、②高度専門職業人養成、③幅広い職業人養成、④総合的教養教育、⑤特定の専門的分野の教育・研究、⑥地域の生涯学習機会の拠点、⑦社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流等）となっています。これらの各要素を満たすことができるよう、教員および職員が一丸となって向かっていける具体的支援を検討して行きたいと思っています。ファカルティ・ディベロップメント（FD）およびスタッフ・ディベロップメント（SD）を同時に行い、相互連携を図りながら大学全体の教育および研究の質的向上および改善への支援を検討しています。学外における研修会等への積極的参加

の支援、また学内においては研修プログラムの開発および研修会などの実施により全体的向上への貢献ができればと思っています。

□地域との連携（Collaboration with Community）

地域ニーズの把握および地域との積極的なコミュニケーションを通しての連携は、今や大学の一つの使命として欠かせないこととなりました。センターは大学外との活発な連携を行うことを強く求められており、応えるべく活動の展開を始めているところです。

高大連携

アドミッションポリシーに基づく本学が求める学生像、および本学ではどんな期待に応えられる大学であるか等を、多くの高校へ周知を行うことは、本格的な少子化を迎え、高校生が自己決定し大学を選ぶ時代に突入する今後、益々重要となることが予測されています。高校生が求める大学へのニーズの把握も同時に行い、高校教育内容の理解を含め、双方向コミュニケーションをさまざまな形でとっていくことができるよう検討しています。

産学官連携

大学生活は長い人生の中で、生物学的には脳の活性度も高く、吸収力も豊かな時期であり、もっとも考えることができる時間と言えます。卒後は厳しい社会の中で、現実的な幾多の困難に立ち向かうことになる運命を横目に、思いっきり長い歴史の中で培われてきた先人の功績や恩恵を堪能し、自分なりの生き方を見つける時期が大学とも言えます。この重要な時期において、実際の社会の活動や現実とあまりにも乖離した教育が提供されることは決して好ましいこととは言えません。できるだけ、教員をはじめとして大学全体が社会との有機的連携を保ちながら教育および研究を遂行することが強く求められています。センターでは、産学官の連携を積極的に進め、学内外の人々の交流の活性化を図り、地域にそして今後の社会に役立つ大学として歩んでいくことに支援をしていきます。

地域住民に開かれた大学

市民の交流の場としての大学が今後は求められてきます。学生、教員および職員が地域活動に貢献しうるよう、積極的なコミュニケーションを図ることが重要です。地域の発展や問題解決に積極的に協力し、地域に開かれた大学を目指せるようプログラムや市民講座などを企画していきます。

□国際的連携（International Collaboration）

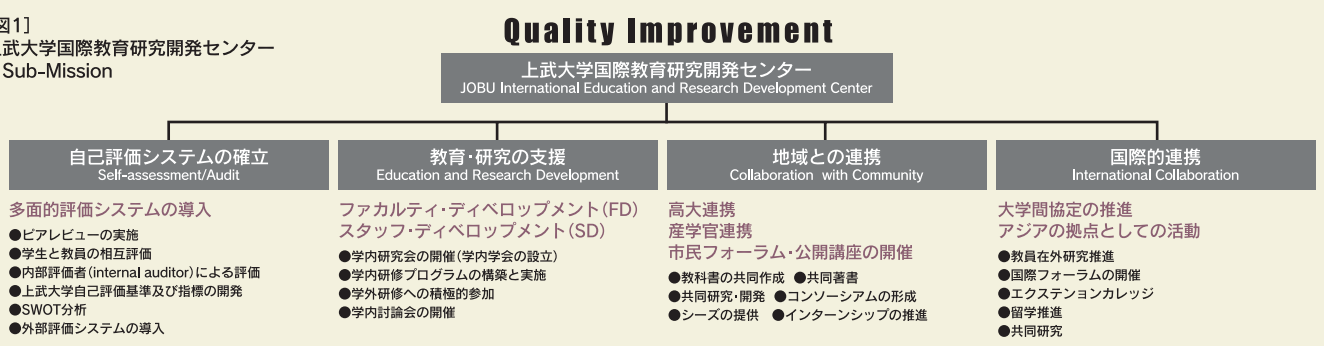
国連の推計によれば、紀元元年ごろの世界人口は2億5000万人ほどであったと見られています。第二次世界大戦後人口爆発がこの地球上で起こり、同じく国連の2004年推計によりますと、2000年には61億人となりました。すでに我が国は人口減少国に突入したわけですが、今後の世界人口の将来予測では、先進地域は人口減少が始まる一方で、発展途上地域の人口増加が続き、世界全域としては、2050年には約90億人とも言われています。このような状況の中、我が国は最も老齢人口指数が高くなっており、間違いなく我が国の今後の高齢社会の質が世界のお手本となることでしょう。その意味においてもこれまでの大学における知見の蓄積を積極的に世界に提供し、共に地球規模でさまざまな検討を行うことが強く求められていると言えます。センターは、世界情勢を積極的に学内に伝え、また、逆に積極的に学内の成果や知見を世界に発信できる拠点として活動できるよう努力し、本センターの使命である「グローカリズムに基づく上武大学の発展を支援する」ことができるよう活動を展開していきたいと思っています。

未来の地球を担う一大学を目指して

女性初の第28代米国ハーバード大学総長のFaust氏のメッセージによると、ハーバード大学は1643年のまだ殖民地時代に、数百の学生とわずかな資産および限られた力と名声でスタートしましたが、「学びを前進させ、それを永続し繁栄につなげること」という強い使命を持ち続けて今日に至っているとのこと。今では間違いなく、世界的なリーダーシップを担っている大学でも最初の一歩と継続の姿勢が重要であったことを実証している一文と言えます。

新しい世紀を迎え、これまでの多くの歴史的出来事を整理し、より発展、進歩させ、本格的な21世紀社会を創り上げるための基盤である『知の創造』が今や世界中の大学に求められていると思われます。上武大学国際教育研究開発センターも、できるだけ世界の情勢や社会の空気を大学に取り込み、教育の質の向上や研究の更なる推進にできるだけ支援し、新しい歴史の一ページに何かを刻み込める大学となるよう活動を展開していきたいと考えています。皆様のご理解と温かいご支援を心よりお願い申し上げます。

［図1］
上武大学国際教育研究開発センター
4 Sub-Mission



0.3 The Third 競争の国際化

上武大学ビジネス情報学部　学部長　荒川　　隆

競争の持つ意味

7月にサッカーのアジアカップ準決勝をかけて日本とオーストラリアが対戦し、90分の試合時間内では決着がつかず、延長戦へさらにはPK戦へと持ち込まれました。試合の間の休憩時間が終わり、始まる前に日本チームは円陣を組み気合を入れて、次の試合に臨む様子がテレビに映し出されていました。ルース・ベネディクトの「菊と刀」によれば、日本人にとって競争は負けたことによって「恥をかくこと」になり、発奮の強い刺激になるよりも、危険なほど意気消沈してしまう原因になることにつながってしまうと述べています。また競争は、必ずしも作業能率を向上させるものではなく、むしろ低下させるものであると分析例を挙げています。また、野球の試合に負けた学生のチームがひとかたまりになっておいおい声をあげて泣いていたことを例として挙げています。そのため日本では、子供の頃からできるだけ直接的競争を避けるような工夫を行ってきていると指摘しています。一方、アメリカ人にとって競争は「よいこと」として考えられており、競争がお互いを刺激し合って最良の努力をなさしめるものであり、作業においては能率を向上させる要因となるとしています。競争の結果、力の勝ったものが勝利を得るのであって、敗者は恥じることではなく、勝者とどうどうと握手するのが礼儀となっています。どんなに負けることがいやだったとしても、負けたからといって泣いたりわめいたりするような人間を理解しがたいとしています。

ところで、現在わが国の小売業界ではコンビニエンスストアが全盛期にありますが、この要因の一つには規制緩和による、競争政策の促進にあると考えられます。このため競争に勝ち抜くために、流通の世界においても規律、秩序、システム化、形式化、ルーティン化、一貫性、組織的な操作が重視されています。ジョージ・リッツアが述べるところのマクドナルド化された様式が構築されているのです。これによって競争は当然であり、いかに合理的で効率的な仕組みを作り上げることによって競争相手に打ち勝つかが、重要な命題となっています。

すすむ国際化

今回の日本チームの試合ぶりを見ていると、いかにも日本的に思える、組織の中において個人と個人の調和を重視する様子があったとしても、負けたとしても声をあげて泣くようなメンバーとは思えないし、国際試合の経験を十分に積んだ結果か、最良の技術を発揮できるような戦いを行っているように思えます。「菊と刀」は戦争中に敵を知るためにということでまとめられたものであり、自らは日本の地を踏むことなく日本人の行動や行動の背後にある基本的な考え方を研究した書としてあまりにも有名ですが、今回の日本チームの戦いぶりを見たとき、ベネディクトも日本人の競争に対する考え方に善し悪しはともかく、大きな変化が生じてきていることに驚くのではないかと思います。

0.4 The Fourth 国際教育研究開発センターの開設に当たって

上武大学経営情報学部　学部長　栗原　信征

地域貢献活動の中核として

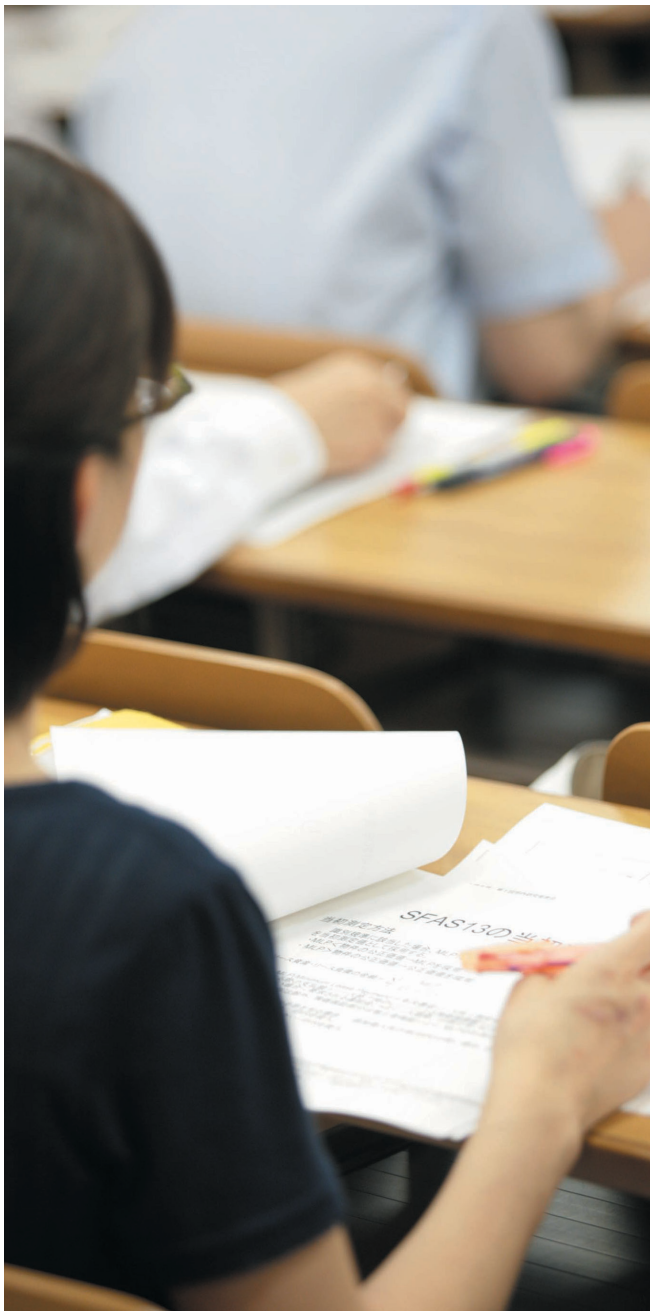
国際教育研究開発センターが開設され、国内外の様々な機関や企業との交流、共同研究開発などに力を入れていくことになりました。大学が今後生き残っていくには、国際化と同時に、地域との密接な協力関係を築くことが最も重要と考えています。同センターがその中核機関としての役割を十分果たすことを期待しています。

上武大学は群馬県に最初に設立された私立大学です。多くの卒業生は地元で活躍しています。本来はこうした卒業生を仲介役として、地域との絆を強固なものにすることができるはずです。しかし、これまで、地元と上武大学との協力関係は必ずしも他大学以上に緊密なものとはいえなかったと思います。もちろん多くの市民講座や高校生向けの「出張講義」を数多く実施してきました。また、高崎市や伊勢崎市の各種審議会などに多くの委員を送っています。さらに、商店街の活性化などにも取り組んでいます。ただ、その取り組みはどちらかといえば、教員個人に委託された形が多く、上武大学という組織として、本格的に取り組んだものとはいえなかったと思います。

大学を挙げて取り組む

センターの設立は、大学を挙げて地域と連携するとともに、産学連携にも踏み込むものと期待されます。産学連携の多くは理系の大学が実施しています。技術指導や新技術の共同開発など理系大学には、実用的な成果を得ることのできる環境があります。では、文系の大学には産学連携は適さないのでしょうか。そうではないと思います。文系の分野にも当然、地元企業にとって重要な知識、“技術”は多数あります。地域振興、産学連携、国際交流、医療・福祉・健康など様々な形での連携が可能です。このような連携を実際に具体化するうえで、センターの設立は大きな意義をもっています。対外的な連携の窓口が一本化され、大学としてこれに取り組む姿勢が明確になります。また、上武大学のどの分野の専門家が担当すべきかなどについても、大学として検討することができるようになります。さらに、ある専門家だけでは対応できないケースでは、学内でチームを組むことも可能になりますし、後から応援を出すこともできます。個人プレーと組織としての対応では、成果に大きな差が出てくるはずです。

早速センター設立直後に、上武大学は中小企業金融公庫前橋支店と提携し、地元企業との産学連携に踏み出す態勢を整えました。もちろん当面は、何を対象とすべきか、内容的には何が中心になるかなどについての模索が続くと思います。しかし、一歩踏み出したことに大きな意義があると思います。結果は自ずとついてくるでしょう。



0.5 The Fifth 新時代の大学院教育

上武大学大学院　経営管理研究科長　柴川　林也

20世紀の後半から21世紀の初頭にかけて、わが国における高等教育に対する文部科学省の国公私立大学に対する指導方針に変化が見られるようになりました。20世紀後半に、バブルの崩壊による経済不況の発生により、IT革命と規制緩和の波に乗ってあらゆる業種においてイノベーションや新事業の取り組みがなされた結果、日本経済は回復軌道に入りました。さらに、グローバリゼーションの進展により、トヨタやキャノンをはじめとする日本の企業が総合的な業績指標において世界のランキングの上位を占めるようになりました。

こうした経済環境の激変に伴い、日本の大会社にかつて見られた新卒に対する社内教育は「すべて自前でする」という慣行に変更が起こっています。すなわち、上武大学東京サテライト大学院など、社会人大学院の再教育に期待する傾向が見られます。アメリカやヨーロッパのビジネス・スクールにおいては、50年前からすでにサマー・スクールを利用しての教育体制が確立していました。その頃留学した者としては隔世の感は否めません。アメリカの大学の夏休みは長く、サマー・スクールの授業を受けるものも多いのです。日本はアメリカに較べかなり遅れたとはいえ、これからの大学院教育の発展に即応するためにも、今のうちにしっかりとした大学院の教育体制を確立する必要があります。

社会的ニーズに適応した教育水準の確保と維持

社会からの高等教育の発展と充実への要請は、規制緩和の影響を受けて少しずつ変わりつつあるようです。文部科学省の中に設置されている各専門分野別の評価機関、たとえば経済分野（経済学分野専門小委員会）では、大学院の修士・博士課程の新設の場合に教員個人の教育・研究指導能力の審査は必要であり、かつ厳しく行われています。これに関係した者の印象として、申請大学に要求される提出書類や手続は相対的に少なくまた簡素化したといえます。

これは「大学設置基準の大綱化と自己点検評価制度の導入」（1991年）及び「大学設置認可の大幅な弾力化」（2003年）により、「事前規制から事後評価」へと政策転換が行われたことに起因しています。私立大学に関する限り、財団法人『大学基準協会』による第三者（外部）評価制度の個別具体的な項目の列挙とそれに基づく勧告は、各個別大学にとって教育の質を向上させる上で重要なことと思われます。同時に、そのことはまた、社会的ニーズに適応した教育水準の確保と維持、またその向上にむけて厳しい自己点検と大学教育の改革に直結する作業を継続的に進めることが期待されています。

評価の高い信頼される大学院へ

これまで大学院に対する期待はもっぱら専門教育を修士課程の2年間に身につけることと、社会に貢献する人材の養成に注がれてきました。しかし、それが必ずしも十分でないことは、近年の大学院における定員の増加傾向とカリキュラムの多様化に見られます。たとえば、大学院の博士課程においては、入学してから３年後あるいは優秀な学生（院生）の場合は2年で終了させうるような教員の指導能力が期待されています。この期間内に博士号を授与できない原因は、多分に学生の研究能力の不足にありますが、同時に指導する教員の側に体系的な教育システムの不備やその工夫への努力の欠如にあります。したがって、自己点検評価制度の導入とそれへの取り組みだけではなく、各大学における国際的にも評価の高い、かつ信頼される大学院の教育水準の確保に向けたたゆまぬ努力が求められているといえます。

0.6 The Sixth 着任の挨拶を兼ねて

上武大学看護学部　看護学科長　森田　孝子

この4月上武大学教員の一員として着任しました。どうぞよろしくお願いします。

こちらに来て5ヶ月、新町の街中をブラブラ歩くのが私の1つの楽しみとなっています。手入れの行き届いた庭先や通りすがりの人が楽しめるように配慮された生垣・鉢植えの花に感心させられ、地元の人とにこやかな笑顔と挨拶ですれ違うときとてもさわやかな気分にさせられるからです。一歩学内に入ると、学生は明るい笑顔で、すがすがしい挨拶を先んじてしてくれます。この地の新人である私にとっては、何にも変えがたい癒しであり仕事へのエネルギー源につながっています。また、このところの嬉しいことは、「先生の大学から来てくれた学生さんは素直でいいですね。とても楽しみな学生さんです。」とインターンシップや職場見学に出かけたいくつかの医療機関の看護部長たち、また、「学生さんからきちんと挨拶をしてくれた。素敵な学生さんたちですね。」と就職案内に訪問した方たちからの評価の言葉を聞くことです。
臨地実習に必要な記録物の準備や実習施設との打ち合わせ、指導者の確保などどうすれば学習が円滑にすすむような支援になるか、その準備調整が、着任して直ぐに行ったことでした。管理の資源である人・もの・時間・情報・環境が制約された中で危機感いっぱいの年度の始まりでした。そんな中で始まった臨地実習も順調に終盤に入っています。よくぞここまで頑張ってくれたと今心から感謝しています。

教育の質向上を目指します

いま学部は、新たな一歩に向けて前進していくことが期待されています。この大学はビジネス情報学部、経営情報学部という情報・経営に長けた学部があり、看護学部としてはどのような特色ある看護学部であればよいのか、同時に、看護者の大学教育はどうあればよいかの共通認識が必要です。看護の専門職者としての一般教養と専門実践能力の礎をしっかりと身に着けてもらうために整えなくてはならないものもあります。学士課程における看護学教育は、「①保健師・助産師・看護師に共通した看護学の基礎を教授する。②看護生涯学習の出発点となる基礎能力を培う課程。③創造的に開発しながら行う看護実践を学ぶ課程。④人間関係形成過程を伴う体験学習が中核となる課程。⑤教養教育が基盤に位置づけられた課程。」という特質があります。これらを踏まえた卒業

時到達目標への課題もあります。これらを検討するために、最終的な価値判断の拠りどころになる学部の理念と基本目標を大学の理念に基づいて整備することが必須です。その上で教育組織の柱である教員組織を整え、教育の質向上のための啓発活動、大学教育としての看護学教育の独自性の明示等をシステム化して整備確立していくことが求められます。また、来年3月に学年進行が完了するに当たってこの4年間をきちんと点検評価しておくことも重要な課題です。

看護という専門職は法と倫理を遵守し法の範囲で法に守られながら仕事をしています。したがって専門職として持っている根拠法規とICNとJNAから出されている倫理綱領は看護者として守るべき行動指針であり、これらは基礎教育における各科目の中で教案に織り込みながら指導しなければなりません。教員は役割モデルでもあります。教育方法についての共通認識も必要です。アサーティブなコミュニケーション、チーム思考を持った教員の組織化も課題です。

一歩ずつ歩んでいきます

幸い意欲ある教員に参集いただいている現状の中で、FD活動（教員の組織的な質向上啓発活動）も本格的に稼動し始めました。遣り甲斐のある日々が続きます。この大学の看護学部が担っているミッションは実践能力を持った看護実践家の育成にあると考えています。学生の成長を願い、この街の方々や看護師仲間、学生、教員の皆さんに支えられながら、一歩ずつ確実に歩んでいければと考えています。日頃から感じ考えそして伝えたいことの一端を述べました。　皆様からの忌憚のないご意見をお願いします。

雑感

上武大学経営情報学部
講師
竹内 芳衛

雑草精神［あらくさだましい］

上武大学の関係者なら誰でも知っている四字熟語があります。それは「雑草精神」です。なぜなら上武大学の建学の精神であるからです。上武大学関係者に「雑草精神という言葉を知っていますか」と尋ねることは、道行く人に「いま、あなたの心臓は動いてますか」と尋ねることよりも確実に肯定的な返事が得られる行為でしょう。読み方も全員知っているので、それを尋ねることも無意味です。「あらくさだましい」と読みます。

なお、この拙文は上武大学の建学の精神について深く思索しようとするものでは全然ありません。「雑草精神」と表記し「あらくさだましい」と読むということから浮かんでくる皮相的な雑念を書いただけであるということを、あらかじめ断っておきます。上武大学の建学の精神については、一般の方々も上武大学のホームページを見ていただければ概要を知ることができるようになっています。

さて、一般の方は、初めて「雑草精神」という四字熟語を見たときに何と読みましたか。推薦入試の面接員のとき、受験生が「貴学の建学の精神である『ざっそうせいしん』に共感し、ぜひ入学したいと思い、受験しました」と話すのを聞いたこともあります。たしかに辞書で見ても、「雑草」は「ざっそう」と読ませ、「精神」は「せいしん」と読ませるようですし、「あらくさ」は「荒草」と表記し、「たましい」は「魂」と表記するようです。

だから一般の方々の中には、上武大学の建学の精神である「雑草精神」を見て「ざっそうせいしん」と読む人もいるだろうし、逆に「あらくさだましい」と聞いて「荒草魂」という表記を思い浮かべる人もいるだろうと思います。どちらも間違いなのですが、あえて間違いの度合いが大きいのはどちらなのでしょうか。もちろん「雑草精神」という表記と「あらくさだましい」という読みとは、表裏一体で、不可分なものではあるのですが。

ところで、人の名前について昔は、男性は表記が、女性は読みが重視されると聞いた憶えがあります。例えば、「伊藤博文」は「いとうはくぶん」と読んでもよいが「伊藤弘文」と書いてはいけない、「うめ」という女性は「梅」とも「卯女」とも「宇女」とも表記する場合がある、などです。閑話休題、上武大学の建学の精神の本源は、「雑草精神」という「漢語」にあるのでしょうか、「あらくさだましい」という「やまとことば」にあるのでしょうか。

ここまで皮相的な雑念を書きつづってきましたが、さすがに少し資料を見てみることにします。『上武大学二十五年史』（上武大学発行）の56頁には「〔二〕建学の精神と理念：＊「雑草精神」の誕生」という項中で「草蔭の…荒草立ちぬ」という万葉集東歌が紹介されています。同書は全国123館の大学図書館が所蔵しているようです。また、本学には「あらくさ奨学生制度」と名づけられた奨学生制度があります。

これらだけから結論づけるのは短慮ではありますが、まず「あらくさ」という「やまとことば」があって、それに「雑草」という「漢語」をあてたのでは、という想像が浮かんできます。ただその場合、なぜ「あらくさ」を「荒草」ではなく「雑草」と表記したのかなど、雑念は尽きませんが。ともあれ、建学の精神は「あらくさだましい」という「やまとことば」に「雑草精神」という「漢語」をあてたのでは、との想像がここまでは浮かびます。

ところが、上武第一幼稚園に「三俣貞雄先生顕彰像建設委員会、昭和61年5月14日建立」の石碑があり「あらくさせいしん、大謙書」と刻されているのです。なぜ大学は「あらくさだましい」で幼稚園は「あらくさせいしん」なのか、校種の違いに配慮したのか；学生と園児の発達段階の差に配慮したのか、偉大な教育者であった学祖三俣貞雄初代理事長先生の深い考えによるものでしょうが、浅学非才の身には所詮、正解に達しえない雑念でしかありません。

地球の嘆き

上武大学ビジネス情報学部
教授
中村 雄司

私は地球です。私はいま不治の病に侵されているようだ。熱が出ているが、それほど高熱ではない。しかしながら熱は下がらない。節々が痛むが、動けないほどではない。病名はいまだ判らない。したがって、処方箋が決まらない。掛かりつけの医者は少し様子を見ましょうという。薬を戴いたがどうやらビタミン剤らしい。不安なので宇宙病院へおもむいたが、検査・検査でなかなか診断が付かない。内科に行ったり外科に回されたり、脳の検査までさせられた。レントゲンだけでなくCTスキャンもした。しかし、ここでも病名ははっきりしない。どうも働きすぎからくる疲労が原因ではないかと、少しの間仕事をやめて、ゆっくりしなさいと。平凡な結論だ。だが不安は解消しない。

なにせ私が休んでいたら、一番困るのは私に住みついている人間たちではないか。私に名前を付けてくれたのはその人間だ。私を宇宙の一員だと認めてくれたのも人間だ。その恩人に苦労をそして悲しみを与えたくはない。もう少し頑張ろう。

このところ、時々高熱がでたりする。身体が一段と重たく疲労を感じる。時々胸部に激痛がはしる。一瞬のことだ。心配だ。今度は名医が居るという、新宇宙病院へ行った。その名医は私を診るや否やすぐさま言った。あなたは癌に侵されていると。調べてみないと正確には特定できないが人間と言う細胞が癌化しているようだと。尊敬をし、信頼をもし、そして恩義を感じていた人間が私の体を蝕んでいようとは思いもよらなかった。私の心は悲しみでいっぱいだ。

名医は言う、手遅れにならないように、癌を切除しなさいと。名医は外科が専門だとか。

今では早期発見し適切な治療で完治できるとか，完治できなくとも寿命近くまでは生きられるとか。でもしかし自問する。私の存在を認める人間なくして、私の存在の意味はあるのかと？

どうして人間細胞は癌化したのだろうか。本当は初めから癌細胞だったのだろうか。私が鞠のように球体であるなどと言い出した人がいるからか？私が世界に客観的に存在しているなどと言う者が現れたからか。それとも、人間たちのなりわいが工業に依存し始めたからか。彼らの病は近代といわれている時代から始まったものなのだろうか？確かに人間たちの仲間が急激に増えたように思う。そしてやたらと私の身体のあっちこっちを動き回り、機械というもので掘ったり穴を開けたりし始めた。美しき緑の森とコバルト色の海は失われ始めた。自由・平等・ベンサムだとか？全くえらく迷惑したものだ。まだその頃は我慢が出来た。だがもう彼らの膨張する活動には我慢出来ない。近代の啓蒙は未完なのだろうか。だとしたら65億を超える彼らの仲間はいったいどうなるのだろうか。21世紀情報化社会の現代も近代の枠組みの外にあるものではない。

どうやら、真の原因は彼ら自身のなかの欲望にあるに違いない。人間たちの欲望の無限性は人間自体の本性であるのだ。私に原因があるなどといわないで欲しい。私が彼らに暗示を与えたのではない。生物としての欲求が対象に直接的に結びついていたものが、人間においては分離・解き放されたのだ。母体から産み落とされた赤子の乳房を求める直接的な自発的な欲求とは異なり、彼らの欲望はミメーシス的なものだ。私が彼らの手本であったのではない。彼らの間でかってに模倣的欲望の機制を構築したのである。

かれらの欲望の肥大化をとめるものはないに違いない。だとしたら人間の欲望は私と同様不治の病だ。私は深い悲しみに沈んでいる。

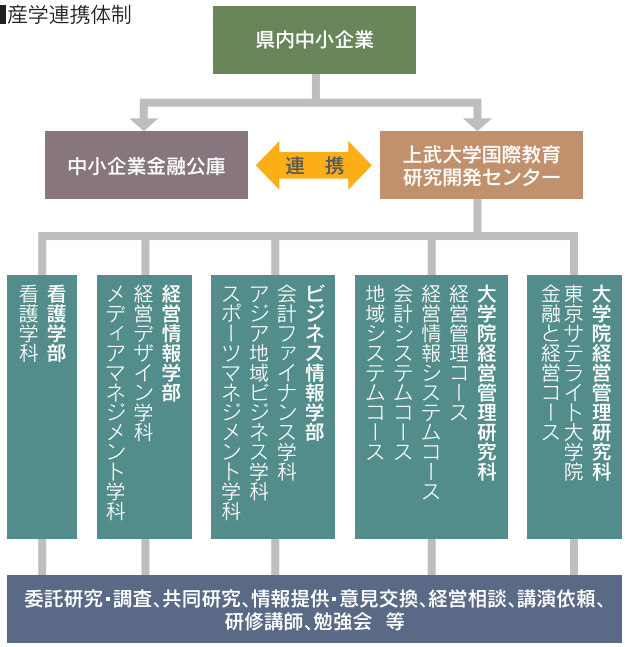
TOPICS

1 中小企業金融公庫前橋支店と産学連携協定を締結

6月19日(火)に中小企業金融公庫前橋支店と産学連携の推進に関する協定を締結しました。この協定においての具体的な取り組みは、同支店の取引先企業約700社からの要望に対し必要に応じて、大学内の国際教育研究開発センターで受け付け、企業の研修や講演会に講師を派遣したり、経営相談などに応じます。将来的には企業との共同研究などにも発展させていきます。

協定書に調印した奥山学長(右)と中小企業金融公庫今井支店長(左)

■産学連携体制



2 学内研究発表会が行われました

7月23日(月)高崎キャンパスにて、教員の教育及び研究資質の向上を図ることを目的とし、上武大学学内研究発表会が行われました。各学部から約70名の教職員が参加し、授業改革やリース会計、テロリズムにおける精神的影響についての文献的考察など、さまざまな分野での発表が行われました。

第1回学内研究発表会

- 『リースにおける残価保証の測定論』　ビジネス情報学部　教授　石井　明
- 『赤松要の経済学』　ビジネス情報学部　准教授　田中　秀臣
- 『延喜弾正式27路遇親王条(えんぎだんじょうしき27ろぐうしんのう)をめぐって』　経営情報学部　准教授　中村　光一
- 『授業改革「積極性を引き出す」一科目「プレゼンテーション」を基に』　経営情報学部　准教授　黒澤　廣宣
- 『男性看護師増加のための戦略的アプローチ～職業選択時の行動・思考パターンの分析と今後の課題～』　看護学部　講師　小池　武嗣
- 『テロリズムにおける精神的影響についての文献的考察～Bibliographical consideration of mental effects on terrorism～』　看護学部　講師　香月　毅史
- 『在宅酸素療法と在宅NPPV療法の併用事例におけるNPPV導入後の生活体験と馴化状況』　看護学部　助手　神津　朋子

編集後記

ニューズレターのタイトル「Fine」にはさまざまな意味が含まれています。「すばらしい」「美しい」「元気な」「洗練された」「上品な」「鋭敏な」等です。本ニューズレターは多くの読者の方々に元気を届け、社会に敏感で最新の情報を、やさしく、美しく、心癒される社会となるよう一緒に創り上げたいというメッセージが込められています。　(一)

2007年10月、周りの方々の協力を得て、遂にFine第1号を創刊することができました。ところで、10月1日はコーヒーの日だという事を皆さんはご存知でしょうか。全日本コーヒー協会が1983(昭和58)年に制定したそうです。Fineを片手にコーヒーを一杯、なんてどうですか。(ワカ)

できるだけ読みやすく、メリハリのある誌面を作るのが編集するときに考える一番のポイントです。まずは自分が見て読みたくなるようなビジュアルが基本なんですね。なんとか第1号を刊行することができました。今後もよい誌面づくりを心がけていきます。　(の)

Fine
ファイン VOL.1
上武大学国際教育研究開発センターニューズレター

〔発行日〕2007年10月1日
〔編集・発行〕上武大学国際教育研究開発センター
〒370-1393 群馬県高崎市新町270-1
TEL.FAX 0274-42-4087(代)